series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第三章

Domestic transfer lobby

峯村　明

リ・コンストラクション

登場人物
3・Domestic transfer lobby
086.　snowy emotion
087.　Domestic transfer lobby
088.
089.
090.
091.
092.
093.
あとがき
奥付

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
ウィリアムス父子	健の顧問弁護士　父はセオデリック　息子はデビッド
ウィンディ・サトウ	ウィリアムス法律事務所に勤める若手弁護士
メグ	ウィリアムス法律事務所の事務員
間宮 ひろ	日本の高校生

3・Domestic transfer lobby

086. snowy emotion

朝から降っていたみぞれが昼過ぎから雪に変わった。
高校生たちは積雪を喜ばず、みな早々に帰宅していったが、今日はあいにく陸上部の部会がある日だった。三年生が引退し、残る部員は夏の合宿の不祥事から立ち直ろうと、河合マネージャーの意気込みは甚だしく大きかった。

「『雪が降ってるから部会中止にしろ』だあ！？　んな根性なしはウチの陸上部の子じゃねえ！！」

ただの話し合いなんだから今日やらなくたっていいじゃんというブーイングをよそに、裏方の河合は、「来年のインターハイ出場の大願達成の前に雪がなんだ」、とよくわからない理屈をこね、部会を強行した。
夏の不祥事がよほど悔しかったのだろう、河合は彼自身をも含む現二年生中心の来年の新体制に燃え、部会は彼の熱い演説で長引き、ようやく終わった時にはもう暗くなっていた。

しゃべりにしゃべりまくり、清々した顔で「よー、ひろ、いっしょに帰ろうぜ！」と河合は言った。
電車なら降りる駅がいっしょなのだ。
河合はしゃべらせておけば面白いしこまごまと気を使ってくれるのでいっしょにいれば気楽で楽しい相手なのだが、（今日はもういいわ）というのがひろの正直なきもちだった。だが同じ帰り道を断る理由もなく、「いいわよ」とあいまいな返事をした。

スニーカーで雪を踏みながら河合はぽつりと言った。
「ひろ、がんばれよ、来年」
「……うん。がんばるわよ」
「おれはおめえに期待してんだからさ。面倒なことはぜんぶ、おれが引き受けるから、さ。おめえは走ることだけ考えてくれや、な」
「……ええ」

河合は洟をすすりあげ、照れて「へへっ」と笑った。

電車を降りると雪はますます大粒になって降ってきた。河合の家は駅から歩いてすぐだが、ひろのマンションはかなり離れている。新城社長に迎えを頼んで電車の到着時間を連絡してあったが、社長の車はまだ来ていなかった。電話がかかってきて、道路が渋滞しているとのことだった。いっしょに待ってようかという河合の申し出はさすがに断り、待合室を出て駅舎の屋根の下で河合を見送った。

外はとうに暗く、電車を降りた人たちが散って行ってしまうとひろはひとりになった。見上げると大粒の雪が顔に落ちてきた。
河合の気遣いはありがたい、と思う。彼の期待に応えられたら、彼はきっと躍り上がって……狂喜乱舞するにちがいない。その姿がありありと目に浮かぶ。だが、ひとりになってみると、ひろは自分の想いがひとりの人にしか向かっていないことに気づく。
ここにこうして立っていれば、彼が迎えに来てくれるような気がする。新城不動産の社名の入ったワンボックスで。無愛想な、皮肉な目で、「道路が混んでた」と不機嫌に言い訳しながら。

（……桧山さん……）

泣くのを懸命にこらえていたあの時、ベンツの窓を開けてくれた。外から流れ込んできた、真夏の夜の桧の香りを。
別れ際に背中を押してくれた。手の平の温もりを。
ひろの五感はよく覚えている。

（……どうしてるかな……）

吐く息の白さと、落ちてくる雪の冷たさが、桧山のいない四ヶ月の時間をひろに突きつけてくる。
濃密な夏と、去っていった人たちを想う秋が過ぎて、ひろはひとりになった。
夜空を見上げて、ほうっ、と大きく息を吐く。

「ひろ！」と、男声が呼びかけてきた。声の主があの人だったら、私はどうするんだろう、とひろは思った。
「遅いわよ！」と怒ってみせるだろうか、「ぜんぜん待たなかったわ！」と笑いかけるだろうか——

ベンツのヘッドライトの光の中を雪が舞い降りるのが見える。降り積もった雪はいつか溶けて消えてしまう。だが積もる想いは——

歩道の新雪にローファーの足跡を残し、暖かな車中にもぐりこむと、新城社長は髪の薄い頭をかきながら「ごめんごめん、遅くなっちゃったね」と言った。
「ううん。いつもありがとう、富夢おじさん」

「どしたのよ、改まって」
　ひろは、ふふっと笑った。
「うん。あたしって、いっつもおじさんを頼りにしちゃってるから」
「そうかい？　いくらでも頼りにしてくれていいよー。ボクはひろちゃんが笑ってくれるんならなんだってしちゃうよ！」

（私がひとりになると、いつのまにかおじさんがそばに来て笑わせてくれた――）

「ボクはひろちゃんが幸せならそれでいいのだ！」
　なんちゃって、と付け加えて新城社長は大きく笑った。

　ひろはコートの襟の中にあごをうずめ、ありがとう、とつぶやいた。

087. Domestic transfer lobby

ウィンディは完全にパニックに呑まれていた。
今朝、ブリスベンへ出張した老ウィリアムスが忘れ物をしていった。老ウィリアムスが忘れたというより、ウィンディが渡し忘れたのだ！

「信じらんない！！」
事務員として雇われている学校出立ての女の子、メグに食ってかかる。「なんだってこのあたしが！！　こんなミスしなくちゃなんないのよ！！」

事務員メグは最近のサトウ先生はぼうっとしがちだと思っていたが賢明にもそのことにはふれなかった。そのかわりに提案をした。「なんとかしなくちゃ。サトウ先生」
「わかってるわよ！！　そんなこと！！」

思いもよらないミスをしたショックで頭がまったく働かない。そのことがまたショックでさらに思考停止に陥るという悪循環だ。
メグがおそるおそる再び提案した。「ウィリアムス先生に届けたら？」
ウィンディは反射的に怒鳴った。「バカ言わないでよ！　ブリスベンまで何時間かかると思ってるの！！」
「でも……どうしても必要なものじゃ？」

どうしても必要な重要書類をなぜ忘れてしまったの！！　あたしってなんてバカ！！
じだんだ踏むウィンディの頭の中では不毛な堂々巡りが繰り広げられている。幸か不幸か、桧山 健はその現場にやってきてしまったのだった。

老ウィリアムスの出張には秘書役の男性職員ベンジャミンがついていき、デビッドは私用で休みをとっていた。健はウィリアムス父子の不在を知らずに来てしまったのだ。事務所に両ウィリアムスがいないのを見て彼は中に入らずに帰ろうとした。

しかしハンター・ウィンディの目は獲物を、もとい、健を見逃さなかった。

「ケン！！」
　大声で彼を呼び止める。まるで狙い打ちだ。桧山は思わず立ち止まって振り返ってしまった。
「待って、ケン！　一大事なのよ！！」

　一大事を招いた原因はウィンディの説明の中でウィリアムス所長本人と秘書役職員の注意力不足ということになっていた。
　メグはあきれて頭を振ったが賢明にもそのことにはふれなかった。そのかわりに提案をした。

「なんとかしなくちゃ」
「わかってるってば！」横から口をはさまれてウィンディはうなるように言った。うなりながら、名案が天啓のようにひらめくのを感じた。
「私、私がブリスベンまで行くわ！　お願いよ、ケン！　私といっしょに行ってくれない！？」

　メグは思いがけない展開にあんぐりと口をあけてしまった。
　ついさっきその提案を一蹴したのはどこの誰だといいたかったが賢明にも黙っていた。
　ケンはウィンディがいない時を見計らって事務所にやってくる。たいていは彼のレストランで焼いているお菓子を持参して事務員の労をねぎらってくれるのでメグは彼のファンだった。彼がウィンディを避けているのは傍目には一目瞭然で、その彼が今まさにウィンディの毒牙にかからんとしているのだ。
　彼女は今こそケンのためになにか言わなければと前に進み出たが、ウィンディの迫力のある一瞥を受けてその決心もあえなく吹き飛んでしまった。

088.

　法律事務所のクライアントにすぎないケンがウィンディ・サトウの大ポカの尻拭いに付き合ういわれなんかこれっぽっちもないわ、さっさと断っちゃって！　とメグは心の中で叫んだがそれは通じなかった。

　ケンは「わかった」と言下に言ったのだ。

　そんなの、いやだ！　とメグは叫びたかった。

あこがれのケンが女郎蜘蛛の糸にねっとりからまれていく有様がリアルに思い描かれて、蜘蛛嫌いの彼女は気も狂いそうになった。

「……てくれ」
そのケンがなにか言っている。
「チケットを手配してくれ。出発の時間も確かめて……」
「は、はい？」
「航空機のだ。それとも陸路で行くつもりなのか？」
ウィンディのぽかんとした顔を見れば、彼女がなんにも考えていなかったのはあきらかだった。

出発までの二時間でウィンディは体勢を立て直した。秘書役職員ベンジャミンを携帯電話でつかまえるとくだんの書類は明朝一番の会議で必要なのだとわかり、今日中に届けられることを断言すると、老ウィリアムスは心底安堵した風だった。
ウィンディが電話するまでふたりとも忘れ物に気がつかなかった様子で、ウィンディはミスを追及されるまでに至らなかったどころか、すばやい気転をほめられたのだ！

かくてブリスベンまでの空の旅はケンのエスコートつきという豪華にしてお気楽なものに変わってしまったのだった。

（なんてラッキーなの！！！）
先刻まで青ざめていたウィンディの頬は現金にもてかてかと輝き、化粧直しにも力が入った。
（私には神さまがついてるのよ！！）

チケットの手配を頼まれた事務員はネット上で時刻表を見て、ブリスベン到着が夕刻になるのに気がついた。そのあとブリスベンを発つ、復路の便がない……

往復のチケットといっしょにホテルをとらなくちゃならないのかしらと考え至って、ぞっとした。
緊急事態とはいえ、あこがれのケンが女郎蜘蛛といっしょのホテルに……そんな恐ろしいことは考え付かなかったことにした。わざわざお膳立てするなんて、あこがれのケンのためにもだんじてできることではなかった。

老ウィリアムスとベンジャミンの分はすでに予約してあるのだから、いざとなれば融通してもらえばいいのよ、とむりやり自分を納得させる。ウィンディには怒られるかもしれないが、元はといえば彼女が起こしたトラブルなんだし、あたしはさっぱり気のきかない事務員だもん。
後々いじめられようが、クビになろうが、少しでもウィンディに有利になるようなことは、ぜったいしたくありません！

メグは神さまにそう宣言したのだった

089.

空港へ向かうタクシーの中でウィンディは甘えるように言った。
「ごめんなさいね、ケン。ぜんぜん無関係のあなたをこんなことに巻き込んでしまって！　でもお恥ずかしい話なんだけど、あたしブリスベンに行った事がないのよ。ひとりで大事な書類抱えて、私が行かなくちゃ、って考えたとたん、すっかり怖気づいてしまったの。ダメね、女って。ほんと、どうしようかと思ったわ。あなたがすぐに決めてくれて本当にうれしかった。ありがとう、ケン、あたしのために――」

「無関係じゃない」

１月の豪州は夏の真っ盛りもいいところで、年中さわやかなアデレードも昼間はそれなりに暑くて、桧山は暑いのは苦手だった。日本の夏とは比べようもなくからっとしている土地なのだが、別の意味で暑苦しさを覚えて、不機嫌にぼそっと言った。

しかし盲目の恋に落ちているウィンディにとってそれは、いくらでも拡大解釈可能な態度と一言であった。

声にはださなかったが（ああ、ケンたら……あたしたちは無関係じゃないって……）
というほどの意味を込めた熱いまなざしを隣にすわる青年に向けた。

「その会社の株」桧山はウィンディの膝の上のアタッシュケースをちらりとみる。「オレもいくらか持ってる」
ウィンディは、え、と固まった。
「ウィリアムス先生はオレの代理人としてブリスベンへ行ってるんだ」

ブリスベン行きの国内線はほぼ満席の状態で、桧山とウィンディの座席はすっかり離れ離れとなり、気まずい隣り合わせは免れた。
今日の仕事上のミスは気の弱そうな事務員をにらみつけておけば発覚することはないだろうが、ケンに与えてしまった心証はかなりまずいものだとウィンディは考えた。なんとか失地を回復する必要がある。せっかくただで手に入れたケンとのブリスベン旅行を――旅費は事務所の経費

がまかなってくれるはずだ——ただ終わらせるなんて、ウィンディにとってとんでもないことだった。

こんなすごいチャンスが二度あるとは思えないわ。なにがなんでもモノにしなくっちゃ——！

三時間あまりのフライトの間、ウィンディは真剣な顔つきで『彼の心を取り戻す方法』を幾通りも考えていたのだった。

*

ブリスベン空港の国内線到着ロビーはひどく混雑していた。多くは真冬の北半球からやってくる観光客たちのためで、彼らはここで飛行機を乗り換えて豪州各地へ散って行き、また戻ってくる。

ウィンディたちの到着前に別のルートの機が着いていて、団体客が降りたばかりだった。
アジアの学生たちの団体で、浮かれた私語がかまびすしい。
（騒々しいわねえ！）ウィンディは眉をひそめてこっそり舌打ちまでする。

混雑しているのでケンとはぐれないよう彼につかまっていたいが彼はそっけなかった。子供じゃあるまいし、空港の出口くらい自分で探せという態度だった。が、〝大事な書類〟を抱えているウィンディをおいていくわけにもいかず、ケンは適当に周囲を気にしながらロビーを歩いていた。ふと、周囲を飛び交っている騒ぎは日本語だと気がついた。

（日本の高校生——？　修学旅行か——？）

急に悲鳴がきこえた。骨格のせいだろうが、白人女性の声というのはとにかく大きくてよく通る。今のはウィンディの声だった。
（なんなんだ……）舌打ちしたい気分で雑踏の中を少し戻る。
ウィンディの長身はすぐにわかった。が、その足元に白いソックスと焦げ茶色のローファーの足が投げ出されていた。
（この忙しい時に！）

ウィンディは高校生とぶつかって相手を転ばせたらしい。彼女の方が大柄なのだからどうみてもそういうことだ。

とにかく先に謝ってしまおうと健は「Excuse……」と言いながら転んでいる高校生に手を差し出した。

090.

「ごめんなさい！　ケン！　あたし、よそ見してたのよ！」

　ウィンディが健の頭上で口早にまくし立てた。謝る相手が違うだろうと彼は思ったが、それどころではない。

　相手の日本の女子高生は尻餅をつくようにお尻から転んだらしく、足を前に投げ出し制服のスカートが太腿の半ば以上までめくれ上がっていた。だが彼女の目は健に釘付けになっていて乱れたスカートを直すとか立ち上がるとかいうところまでいかない。目のやり場に困った彼は膝をついて左手で女子高生の上腕をつかみ、右手を背中に回して抱き上げるように引き起こしてやった。

「立てる？」
「――はい」と女子高生はつぶやいた。
「怪我はないか？」
「――はい」
「すまなかった」

　女子高生はそばに立っている長身の美女をみあげて、うわのそらで「――はい」と言った。
　青い目の美女は女子高生を見下ろし、早口でまくしたてた。「わるかったわ、急いでたのよ、私たち。怪我はないのね？　オーケイ。行きましょう、ケン」

　雑踏の向こうからいかにも体育会系の顔をした男が走ってきた。高校生たちの引率教師だ。生徒のひとりが上背のある二人組みの男女に挟まれているのをみてとんできたのだ。

「間宮！　なんだ、どうした、トラブルか？」

　ウィンディがいらいらした様子で口を開きながらぐっと前に出ようとするのを健は手で止めた。

「連れが彼女にぶつかって転ばせてしまったらしい。どうもすみません。怪我はしてないようですが、なにかあったら連絡してください」
　しぶるウィンディから名刺を一枚せしめた健は、教師に手渡す。

「あ、いや、そうですか？　そうなのか？　間宮？」

　女子高生は背中に回した手をまだそのままにしている健が気になる様子でうわのそらで、うなずいてこたえた。

「そうか？」そりゃどうも、と引率教師はなにか言いたげな不機嫌な美女を避け、話がわかりそうな若い男の方にぺこぺこと頭をさげた。

「ほら行くぞ、もう時間ぎりぎりなんだ」せかせかと促されて女子高生は自分から健の手をはなれた。でも目は彼をはなれない。
　健はすがるような目でみあげてくる女子高生にかける言葉を思いつかず、じっと見返してから唇の片側をぎゅっともちあげた。すると女子高生の表情が緩み、泣き出しそうな顔になった。

「間宮！！」
「ケンてば！！」

　両側からせかされてふたりは離れた。

　国内線乗り継ぎロビーでのでのほんの一瞬のできごとだった。

091.

　ふたりを一目みるなり老ウィリアムスは顔をしかめた。「なんという格好だね！！」

　健は洗いざらしのコットンのシャツにジーンズというラフな服装だった。一方のウィンディはジャケットを着用しているものの、その下はワンピース、それも目のさめるような鮮やかなブルーでカッティングはえらくセクシーだった。
　老ウィリアムスはふたりを見くらべて不満そうに頭をふったが、男性秘書ベンジャミンがとりなした。「まあいいじゃありませんか、所長、この際こまかいことは」

　ふむ！　とウィリアムス所長は荒い鼻息を鳴らし、「まあ、な。〝大事な書類〟は無事届いたことでもあるし、こまかいことはとやかく言うまい。しかし、ケン、君は明日学校があるんではないのかね」

　健はうなずく。今は夏休み中なんだが、そういうことにしておこう。

「ではすぐに帰って勉学に励みなさい。ご苦労だった。ウィンディ、君はせっかくこんなところまで出張してきたのだから、しっかり仕事をしていくように。明日の会議には同席しなさい」

　ウィンディは目をむいた。

「で、でででででも！　先生、私、今夜泊まるところがありませんわ！　事務の子ったら『予約するの忘れました』って。それにケンだって、今夜はもうアデレードへ行く便がないんですよ！」

　男性秘書がにっこりとウィンディの肩をたたいた。
「先生と僕の部屋はとってあるんだ、僕は先生と同室させてもらうから僕の部屋が空く。きみはそこを使えばいい」
「そ、そんな……」
「オレのことも心配しなくていい。駆け込んでただで泊めてもらえるところのひとつやふたつ、ブリスベン市内にもってる」
「そ、そんな……」
　男性秘書がため息をつく。
「いいねえ、ケン、きみは今日使った国内線だって半額で乗れるんだろ？」
「ええ、あとで払い戻してもらわないとね」
「おおそうだった、明日われわれがここにいるなら事務所を開けておくこともないな、よし、メグには休みをやろう」
「それ、オレが電話してやるよ、ウィリアムス。エアチケットの清算のことも言っておかないと」

　老若の男性たちがのどかにうなずきあっているとなりで、ひとりウィンディ・サトウは神さまを呪ったのだった。

　ブリスベン市内には桧山 健をオーナーと呼ぶホステルがふたつある。これまた健が継いだ遺産のひとつで、バックパッカー向けのリーズナブルな宿泊施設だ。
　どちらも大きなものではなく満室のことが多いが、どっちかに一部屋空いてるだろうとふらりと入っていくと管理人がとんできてオーナーを歓待し、一番いい部屋のキーを渡される。

　観光シーズン中は空けておかなくていいと言ってあるのだが、管理人たちはオーナーが戻ってきたからにはいつ何どき部屋の要請があるかわからない、ということで必ずどちらかのスゥイートは空けておこうと示し合わせていた。

　食事が運ばれてくる間、桧山は工作にいそしんでいた。

（ちょっと人には見せられない姿だよな）
　コンビニエンス・ストアで買ってきた接着剤と綿棒でコサージュを修理しているのだ。

　空港のロビーで間宮ひろを助け起こした時、彼女のそばにこれが落ちていた。ひろが落としたのだろうが、ウィンディとぶつかったショックで無残につぶれ、ピンが折れてなくなっていた。すぐに返さなかったのは、どこかで見た、と強くささやくものがあったからだ。しかしどうしても思い出せない。
小さな花とほどけかかった細いオーガンジーのリボンを接着剤で補強して形を整えていると、食事が届いた。

*

　オレってほんとにいいかげんなやつだと彼は思った。
今日――昨日か？　――会ったのは間宮ひろだ。引率教師もそう呼んだし、ぜったい間違いない。なのになんで奈々子の夢をみるんだろう？
まあ、ウィンディの夢でさえなければだれでもかまわないけどな――

　しかしこの夢……前にも見なかったかな？
　去年の夏、まだ日本にいるころだ
　ひろが突然陸上部の合宿から帰ってきた、あの日
　そうだ、あの日の夜だ
　これと同じ夢をみた
　金と橙の光のあふれる水辺に奈々子が立っていた
　スリーブレスの白いワンピース姿で　気持ちよさそうに風に吹かれていた
　風になびく黒髪の耳元――

　明け方の薄暗い部屋、彼は起き上がったベッドの上でサイドテーブルに置いたコサージュを目でさがした
　奈々子の耳元を飾っていたのは、これだ。

092.

　屋上の広々したテラスでのんびりと朝食をとっていると、話しかけてきた者がいた。美しい金髪に真っ青な目の、育ちのよさそうな少年――まだ十代だろうと思われる。

　一人旅ですか、と訊いてきたので、うなずくと、彼もまた「ぼくもです」という。

「オーストラリアに来て、まだ日が浅いんです。夏休みの間にあちこち旅行しておこうと思って、メルボルンから列車を乗り継いでブリスベンまで来てみたんだ。自転車を借りて、ゴールドコーストには真っ先に行ったよ、素晴らしいところだけど、参ったよ、陽射しがものすごいんだもの」

　色白の肌と髪色をみれば、スカンディナヴィアあたりの出身だろう。ものすごかった陽射しを受けた割に、それほど日焼けしていず、涼し気な顔をしている。これまた涼し気な、真っ青な瞳。

「あたり。フィンランドだよ。あなたは東洋の人？」

「こっちで生まれて日本で育った」

「へ……え……日本か。いつか行ってみたいなあ」

「きみは学生か？　歳いくつ？」

「十六」

「高校生？」

　相手は首を横に振った。あまり話題にしてほしくないようだ。しかし十六といえば、間宮ひろと同じ歳じゃないか。十六で高校生じゃないなら……リタイアして家出でもしたんだろうかと勘繰ってみる。

「えーと、あの、あなたはブリスベンを観光するの？　それともどこかへ移動するの？」

「オレ？　ブリスベンへは所用で来ただけなんだ。これからアデレードへ帰るところさ」

「アデレード……ちょっと聞いたことあるな、いや、そうか、もしヒマならいっしょにどうかなって思ってね。これからダーウィンへ飛んでカカドゥ国立公園を探検する[1]。そういうツアーがあるんだ。どう？」

「ダーウィンてまた遠くだな、すまないが遠慮するよ、オレはうちへ帰らなきゃならないから」
　こいつ家出少年というわけでもなさそうだと、桧山は思った。気楽に航空機に乗れる財力はあるらしい。

「うん、きっとまたどこかで会えるよ、なんだかそんな気がする。そろそろ集合時間だから行かなくちゃ。あ、ぼくはレル・ヴァリス。あなたのアドレス、教えてもらっていい？」

レル・ヴァリス。十五歳でヘルシンキ大・医学部へ入学。十六歳の現在、メルボルン、モナシュ大へ編入した、好奇心旺盛なフィンランド出身の医学生である。

[1] 物語は1月下旬。この時期のカカドゥは雨期の真っ最中で洪水に見舞われることもあり、観光は不可とのこと。物語はあくまでフィクションです。

093.

「好きなの、ケン！　あたし、あなたが好きなの！」

　思いつめたウィンディは、年下の大学生の背に向かって叫ぶようにいった。
　自分の容姿にも能力にも自信があってプライドも高い彼女にしてみれば信じられないセリフだった。今まで彼女の目にかかって落ちなかった男はひとりもいなかった。それも大抵は向こうから彼女の手の内に入ってきた。そして互いに心身ともに満足して、さっぱりと別れてしまうか友人リストに載せあうかどちらかで、トラブルに発展したことは一度もない。ウィンディの交遊関係はたいへん器用かつ豊富なもので彼女のひそかな自慢でもあったのだ。

　だがそれも桧山 健に出会ってから一変した。彼のことを考えると自分が本当に初心な娘に――彼女にそういう時代はなかったのだが――戻ってしまった気がするのだ。からだの内があつくふくれあがっていっぱいになり、他のことがなにも考えられなくなってしまう。それは次第に人目につくところとなって、老ウィリアムスに「最近の彼女はまったくどうかしている！」とさえ、言わしめた。
「何か心配事でもあるのかね？」と老ウィリアムスは彼女本人に尋ねた。
「いえ、べつに何も」

　ないわけがない。原因は彼、桧山 健だとわかっていた。
　久しぶりに彼に会っても彼の態度は非も可もなく、それがかえってウィンディを衝動的にさせ、冒頭のアプローチにつながった。彼を追い詰めなければ……という気分だったが実のところは自分で自分自身を追い詰めているのだ、ということにさえ、ウィンディは気がつかなかった。

　健の方は健の方で、こんな場面はおなじみだった。それこそ小学生の時分から女の子に告白された経験がかぞえきれないほどあるのだった。だから追い詰められたウィンディよりずっと余裕があって、いっときの間を持たせたあと、以前から用意していたような返事がすんなりと口から出た。
「オレは、きみの気持ちにはこたえられない」態度も話し方もふだんよりずっと硬いものだ。

　ウィンディが全身をこわばらせるのがわかった。相手を傷つけたくはないが、こういうプライドも高く頭のいい女性に誤解や曲解の余地を与えるような言葉や態度はぜったいに避けるべきだと、これまた彼は経験から知っていた。このあとのことはアプローチしてきた本人の問題なのだが、なんにしても楽しいやり取りではない。
　好意を持つまでに至らないような相手に取り乱されるのを見るのがイヤで、彼はもうずっと以前から女の子をそばへ寄せ付けなかった。きついまなざしで一瞥する彼を女の子の方が敬遠したも

のだ。しかしアデレードへ戻ってきてすぐさま年上の美女に想いを寄せられるとは思ってもいなかった。

「……ケン、どうして……って、聞いていい？」

「理由がいるのか……？」

「……あたしの、どこが不足なの？」

「きみはたいしたひとだと思うよ。オレは尊敬しているくらいだ」

「あなたに尊敬されてもあたし、ぜんぜんうれしくないわ！　ねえ、ケン——！」

「……手を放してくれないか」

「——あなたはあたしがきらいなの——？」

「オレはきみの好意にこたえることはできない、そう言ってるだけだ」

「——好きな子がいるのね？」

「……」

「そうなのね！？　——あなたポーカーフェイスが上手になったわ！　——そうなのね！？」

「ウィンディ。そういうのはきみらしくない」

「どんな子なの？　あ——日本人？」

「……」

「こないだあたしが空港でぶつかったのも日本人の子だったわね、あなたずいぶん親切にしてたわ、あたしを見る時の目とぜんぜん違ってた。そうなのね、あの子が忘れられないのね——」

「なんでそうなるんだ？　オレはなにも言ってないだろう？」

「あの子を愛しているの！？」

「落ち着いてくれ。きみはもっと冷静な人のはずだ」

「あの中学生みたいな子を――」

「……」

「ほら！　あなた図星さされるとそういう目をするのよ！」

「こんなことは言いたくないが、ウィンディ、少し頭を冷やしたほうがよくはないか？」

「あ……あたしより十歳も年下の子に……そう……あたしが年上なのがいやなのね？」

「いいかげんにしてほしい。それは単にきみの思い込みだ」

「――神さま！　ひどいわ、どうしてあたしは彼より先に生まれてしまったの？」

「きみはどうかしている。話にならない」

「――ケン――冷たいわ」

「オレはいつもこうだ」

「ひどい――あたしがこんなに傷ついているのにどうしてもっと優しくしてくれないの？」

「きみは仕事中だろう。ウィリアムスが窓からこっちを見ている」

「仕事なんて！　そんなのどうでも――！」

「オレの権利はどうなる？」

「ああ……！　なんてひどいひとなの！」

「きみが正気に戻るなら、ひどいやつでかまわない」

「――ねえ、ケン。――もしかしたら、あたし、ふられたの？」

「……」

「こういうのをふられたっていうの？　あたしには関係ないって思ってた……」

「生きていればそういうこともあるだろ」

「ねえ、ケン」

「……」

「……ふられた記念でいいわ、いちどでいい、キスしてくれる？」

「NO」

「ホントにひどいひとね」

３・「Domestic transfer lobby」

４・「Exciting vacation」へ続く

あとがき

オーストラリアが高校生の修学旅行先として人気があった時代がありました。最近はどうでしょうか。
表紙の背景は本文と関係のない関西国際空港。

十代のレル・ヴァリスというのを初めて書いてみました。あ、そうでもないか、『Salamander in〜』では十九歳くらいの設定だった。『オリカルクムの記憶』では二十代後半、『コッパと〜』では、四十代中ごろ。
『リ・コンストラクション』では二十代半ばでばりばりの外科医として活躍する人なんです、が、じゃあ、いつ学生やってたんだということになりまして、日本にはないけれども、海外にはあります。飛び級という手が。ただ、医学の分野で飛び級が可能かどうかはちょっとわかりません。

『宇宙船七月号』のクレス・グラヴァシュもその口で、若くして専門分野で活躍する人は多いのです。この手の人が、かなり先になりますがもうひとり、シリーズに出てきます。ああいつになるやら…

2025年3月2日・記

奥付

リ・コンストラクション

第三章　Domestic transfer lobby

2025年 3月5日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　「イラストAC」

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社